

滋賀県は、琵琶湖を中心に平地、丘陵地、山地と同心円状に標高が高くなり、湖東、湖西、湖北の県境付近では1000m級の山々が連なります。また、総面積に占める山地の割合は、琵琶湖の17%に対し47%と半分近くに達し、森林を本拠地とする多くの植物を育みます。さらに、南部と北部の気候の違いや変化に富んだ地形・地質などが、山の植物相に様々な影響を与えています。

1. はじめに

滋賀県では、丘陵地から標高700m位までは、シイ、カシ、モミを主体とした暖温帯や中間温帯の森が広がり、これより上部にはブナやミズナラを主体とした冷温帯の森が広がります。ただ、いずれの植生域でも多くが植林地や本来の植生が破壊された後にできた二次的な植生となっています。山の植物を育む森林は、気候的条件、地形・地質的条件が大きく影響しますが、人為的影響も見逃せません。

2. ブナ林の植物

滋賀県を取り囲む山域には、変化に富んだ森が広がり、多くの山の植物が生育します。中でも標高が700m（県北部では500m程）以上の冷温帯域ではブナ林が広がり、ブナ、ミズナラ、コシアブラ、コハウチワカエデなどの樹木と共に、林床には、トクワカソウ、ミヤマカタバミ、サルメンエビネなど様々な草本植物が生育しています。

また、川の源流には、トチノキ、カツラ、サワグルミなどが生育する渓谷林が見られます。昔から実を食料としたトチノキを選択的に残した結果、トチノキが優占する樹齢数百年の巨木林も見られます。比較的安定した環境が長く維持された巨木林では、ヒナチドリ、クラガリシダ、スギランなどの貴重な着生植物も確認されています。



写真7-10-1
サルメンエビネとブナの巨木

3. 多雪地特有の植物

滋賀県北部および北西部の地域は、冬には多くの雪が降る日本海型気候区に属します。そのため、雪の被覆と圧雪の影響を受け、多雪地ならではの植物が生育します。エゾユズリハ、チャボガヤなどは低木化することで、雪の保温効果を利用し、厳しい冬を乗り切ろうとするものや、タイミンガサ、オオバキスミレなど、多雪環境で新たに生まれ適応してきた植物など、多雪地特有の植物が多く見られます。



4. 北方系の植物

福井県から連なる山域は、滋賀県の北部で2つに分かれ、一方は伊吹山地に、また一方は野坂山地へと続きます。これらの地域には、寒冷化により北から分布を広げた、いわゆる北方系植物の分布限界地となるものがあります。ハクサンフウロ、キンバイソウ、ヒメイズイは伊吹山が南限で、マキノの赤坂山は、カライトソウ、ズダヤクシュなどの植物の南限地となっています。

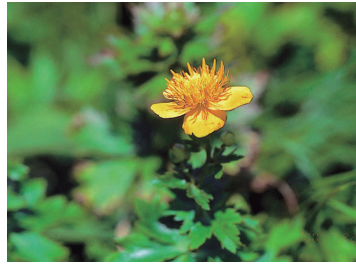


写真7-10-2 キンバイソウ

5. 南部の山の植物

冬の積雪の影響が少ない、太平洋型気候区に属する比叡山や鈴鹿南部の山地には、イヌガヤ(→ハイイヌガヤ)、ナガバノスミレサイシン(→スミレサイシン)のような両気候区に対応種がある植物や、ハガクレツリフネ、カキノハグサ、マルバノキなど、主として太平洋側に分布する植物が見られます。

さらに、森林の発達にくい花崗岩の湿地や周辺には、トウカイコモウセンゴケ、サギスゲ、ヘビノボラズなど貧栄養湿地特有の植物も見られます。(→日本海要素の植物)



写真7-10-3 カツラカワアザミ

6. 固有種(特産種)

特定の地域で発生し分化した植物を固有種(特産種)と言います。中でも、ごく狭い地域に限定される地域固有種には、伊吹山地のルリトラノオ、イブキコゴメグサ、コイブキアザミ、湖西地域の葛川と周辺に自生するカツラカワアザミなどがあります。また、このような植物は、地域での絶滅が、そのまま日本での絶滅に繋がってしまうことから、十分な保護対策が必要です。

7. 山の植物がおかれている状況

「滋賀県レッドデータブック2020年版」には、652種の植物が掲載され、絶滅が心配される山の植物も多く含まれます。その要因は、森林伐採や植林、森林開発、さらに、盗掘などがありますが、なによりも、戦後急激に進められた植林地が成長し、森林環境が大きく変化したことにあると考えられます。さらに、近年、シカが増えたことも山の植物に大きな影響を与えています。

巨木と水源の里をまもる会 青木 繁